
「♪♪」

今日はあかし、未佑のおうちでお泊まり。

でもって未佑ママは帰りが遅くなるからってあかしは先に寝ることになったのだけど、

「しょーじき、眠れないよねえ」

時間は九時半を回ったところ。

あかしが先にお風呂もらって、今は未佑が入ってる。

一緒に入ろって言っても、恥ずかしがって一緒には入ってくれないんだよね。

持て余し気味に布団の上をコロコロ。

未佑ん家は掛け布団がフワフワの綿布団で、あかし好きな感触なのに、使ってる間にこんな風にフカフカになるらしい。

ふかふか。

顔を埋めると、やたらきもちいい。

なんか、未佑の匂いする気がするし。

未佑に言ったら、「そんなこと言わない！」って怒られるから言わないけど。

「……へへへ」

ふかふかだあ。

「あれ、玉置？ もう寝てる？」

15分くらいして未佑がお風呂から上がってきた。

あかしといえ、お風呂の扉の開く音が聞こえてすぐに電気暗くして、寝たふり寝たふり。

未佑がどんな反応するのか見てやろうと思って。

内心イシシってわくわくしてたら。

「……うん。おやすみ、玉置」

そのまま隣の布団に入って、寝てしまった。

え？

何？

早すぎじゃない？

もっと、こう、あるんじゃないの？

ほら、たとえば、寝てるあたしのほっぺつつくとか。

「寝顔は可愛いんだから」とか。

あるんじゃないの？

「すう」

早くも寝息聞こえてくるし。

うう。

……しようがない。

あたしも寝よう。

と、思っではみたものの。

（ぜんぜん眠れる気いしないよー）

未佑は完全に寝てるっぽいし。

家の中すごい静かだし。

ときどき前の道を通る車の音とか、普段は聞こえない、時計のチクタクがやけに大きく聞こえていて。

（なんか、）

なんか、

ふいに、

心細くなってきた。

ううう。

（こんなことなら、寝たふりとかしなけりゃよかった……）

もう遅いけど。

ううう。

「……眠れないの？」

ふいに、

「え？」

未佑？

「起きてたの？」

暗くてよくは見えないけれど、こっち向いて話しかけてきてる。

「うん。寝ようとしたんだけどね。寝つけなくて」

「あたしも」

「そっか」

と頷いて、じゃあ、と、

「はい」

「え？」

「手。つないで寝よ」

布団の中から未佑の手があたしに差し出される。

「眠れないとき、よくお母さんとかお婆ちゃんの手をつないでくれるんだけど、玉置はそういうのってない？」

「……ない」

「そっか。……ほら」

きゅつと、

未佑の手があたしの手を握る。

未佑の温かい体温が伝わってくる。

「未佑の手、あったかい」

「玉置は、少し冷たいね」

「あたし、体温低いから」

「なら、もっとあっためてあげよう」

そういつて両の手のひらで包むように握られた。

「ふふ」

「ふふふ」

そこでお互い苦笑しあつて。

うん。

こういうの、いいな。

なんて思っているうちに。

まぶたの重くなってくるあたしだった。